

日本家政学会
被服構成学部会誌

第38号

平成29年3月

目 次

ごあいさつ	1
日本家政学会学会賞を受賞して	2
平成 28 年度 被服構成学協会 総会	3
平成 28 年度 被服構成学協会 夏期セミナー	
プログラム	4
「生活デザインの視点から見るアパレル教育」	5
「みる・かく・つくる de 人づくり	
- 3H 美術教育の視点を基底に-	6
「高校家政科におけるものづくりを通じた人材育成について」	7
「地域と学校教育を結ぶアパレル人材教育について」	8
「小・中・高等学校における布を使ったものづくりの学習内容と課題」	9
パネルディスカッション	10
講演「今治タオル奇跡の復活 -地域再生とブランド戦略-	11
見学「タオル美術館」	12
夏期セミナーに参加して -現場を知る大切さ-	13
平成 28 年度 公開研究例会	
講演 1 「西陣織の技術を掲げ世界市場へ	
～伝統産業からクリエイティブ産業への革新～」	14
講演 2 「京都の墨流し染・糊流し染 -その新たな可能性-	18
若手研究者研究紹介	
グローバルな高齢化に対応する衣服設計のための日本人と中国人の体型分析	19
第 17 回全国中学生創造ものづくり教育フェア 報告	21
関連学会短信	
日本衣服学会	23
日本繊維製品消費科学会	23
国際服飾学会	24
平成 28 年度 研究動向 (修士論文テーマ・科学研究費補助金研究課題)	25
会務報告	26
平成 27 年度 被服構成学協会 夏期セミナー 収支報告書	28
平成 27 年度 被服構成学協会 収支計算書	30
貸借対照表・監査報告書	31
平成 28 年度 被服構成学協会 収支予算書	32
お知らせ	33

第2回家政学夏季セミナーのご案内	34
第2回家政学夏季セミナープログラム(案)	35
被服構成学部会 規約	36
被服構成学部会 申し合わせ	38
平成28・29年度役員	39
入会申込書および変更届, 退会届	40

ごあいさつ

(一般社団法人) 日本家政学会被服構成学
部会長 大塚美智子

本年度は、世界各地で発生した大きな災害やテロ、東京都知事選、アメリカ大統領選と、世界が大きく動いた年でした。日本家政学会においても科研費の改革により、家政学を基盤とする学問領域が社会学およびその関連分野の中にまとめられてしまうこととなり、家政学の意義を改めて考えさせられました。

しかし、被服構成学部会は皆様のご協力を得て、本年度も未来を見据えて社会に貢献できる活動を遂行することができました。また、布施谷節子先生が学会賞を受賞されるという嬉しいニュースもありました。被服構成学部会からは高部先生、猪又先生に続く受賞で、被服構成学部会をリードしてこられたお一人の布施谷先生の受賞は被服構成学部会員に自信を与えていただき、大変嬉しいことでした。心よりお祝い申し上げます。

平成 28 年度 (一社) 日本家政学会 被服構成学部会公開夏期セミナーは「アパレル人材育成を目指した小・中・高・大学のものづくり教育の方向性」をテーマに、グリーンヒルホテル尾道で 8 月 24 日 (水)・25 日 (木) に開催され、アパレル教育のさまざまなお立場からご講演をいただき、議論を深めることができました。また、二日目の見学講演では、今治に赴き、四国タオル工業組合理事長近藤聖司氏よりご講演をいただいた後、工場見学を致しました。中四国地区ならではの地域産業に密着した、将来の人材育成につながる充実のセミナーとなりました。ひとえに当日まで綿密に企画していただいた、実行委員長鈴木明子先生をはじめ、実行委員の皆様のご尽力の賜物と、心より御礼申し上げます。

また、昨年に引き続き副部会長の川端博子先生にご担当いただき、全国中学生創造ものづくり教育フェアへの支援・指導を行い、部会賞を授与しました。

研究例会は公開講演として「世界市場で評価される日本の伝統的染・織」をテーマに平成 29 年 3 月 8 日に京都女子大学で開催されました。合わせて、講師の株式会社細尾取締役、細尾真孝氏の工房を見学させていただきました。日本の優れた伝統工芸の担い手が減少し、貴重な技術の存続が危惧される中、世界で評価される日本の伝統技術の可能性と新たな視点について多くの示唆をいただきました。

科学研究費補助金基盤研究 A の採択を受けて進められている人体計測は 4 年目となりました。部会員の皆様のご熱心なご協力により、本年度までに 3000 名を超える計測データが得られており、成果の一部は日本繊維製品消費科学会年次大会で報告されました。最終年度となる来年は、本格的にデータ解析を実施することとなります。

平成 29 年度の部会夏季セミナーは第 2 回家政学夏季セミナーとして被服構成学部会、被服衛生学部会、色彩・意匠部会、服飾史・服飾美学部会の 4 部会合同で、“生活の質的向上を目指す家政学の世界” オリンピック・パラリンピックがつなぐユニバーサル衣料の未来をテーマに、信州大学長野キャンパスで実施されます。スポーツメーカーの方、アパレル三次元テクノロジーの専門家、着る”生活動作支援ロボット curara® (クララ) の開発者、オリンピックの歴史研究者、プロジェクションマッピングの専門家、車椅子マラソンの研究者、関係部会員などさまざまな分野から講師をお招きして、講演会とパネルディスカッションが行われます。また 2 日目には、4 部会合同の情報交換会 (昼食)、その後信州大学繊維学部 Fii・上田見学コース、松代見学コースなどが企画されていますので、奮ってご参加ください。これを機に被服構成学とさまざまな分野とのコラボレーションが進み、家政学・被服構成学を活性化できることを期待しています。

日本家政学会 学会賞を受賞して

成長と加齢に伴う体型把握と衣生活行動

元和洋女子大学（現非常勤講師） 布施谷節子

乳児から高齢者までの成長と加齢に伴う体型の把握を行うとともに、着装者自身や他者が、体つきや着装状態をどのように評価するかについて、外観のみならず着脱動作も含めて、評価に影響する様々な要因を衣生活行動の中で明らかにすることに注視した研究を行ってきました。昨年5月の(一社)日本家政学会総会において、「成長と加齢に伴う体型把握と衣生活行動」に対して学会賞を授与されました。誠にありがたく光栄に存じます。私の研究者としての出発は、大学の卒業研究で故柳澤澄子先生から乳幼児の成長・発達に関する研究テーマをいただいたことがきっかけです。その後も諸先輩方のお力添えをいただきながら、体型と成長・加齢に関する研究をできる範囲で続け、その成果を、家政学会誌に細々ではありますが、継続して投稿してきたことが、受賞につながったと考えています。受賞対象の研究概要については、家政学会誌 Vol. 67 No. 6(2016)に掲載されていますので、ご覧いただけたら幸いです。ここでは、やり残した研究などを含めて、誠に勝手ながら、今後の被服構成学の研究に携わる皆様方に提案したいことを述べさせていただきます。

衣服設計の立場から乳幼児の体型や成長発達については、計測の困難さからか、多くの被験者を対象とする研究が行われていないのが現状です。研究に対するよき理解者を得て、組織的に取り組むことができるような方策を講じることが大切だと考えます。私自身の乳幼児の衣生活に関する研究についても、20年以上も以前のデータから得られたものであり、さらなる少子化の中で母子ともに考え方が変化してきている中で、再調査が必要と考えます。

小・中・高校期には、被服構成学上の課題として、制服などの衣服のゆとり設定やサイズ選びなどがあげられます。その他、衣服による自己表現と規範との関連性など、体つきの変化を考慮した着装心理にかかわる研究も、今後ますます重要であると考えます。

女子大生を対象とした研究では、体型の違いに着目しながらいくつかの着装実験を重ねる中で、いわゆる流行が着装評価に与える影響の大きさに気づきました。体型でさえ、時代の求める理想の体型というものがあり、知らず知らずのうちに自身の美の基準となっています。人が行う評価には、常に、流行も含めた外なる規範と、評価者の年齢・性・生活環境・経験などに伴う規範と内なる自己認識が複雑に影響しあい、評価実験ではクリアな結果はなかなか得にくい状況です。今後ともこのような検証実験が継続されることを望みます。

障がい者の衣服については、障がいの程度も種類も多様であり、多くの障がい者が満足するような既製服は限定されます。被服構成学の基礎知識と製作の技能を持って、個別対応の事例を積み上げながら、ある程度までの普遍性を確立してゆくことが大切だと考えます。

私は、家庭科教育を担当したことから、被服領域の教育上の問題点や指導法の改善などにかかわる研究を行ってきました。中学・高校で家庭科の授業数が削減される中で、家政学の研究に基づいた魅力的な授業を行うことができる教師の育成が求められています。現在では、大学でも被服領域の縮小傾向が進み、研究者も減少傾向です。家政学の中で、他の領域とともに被服学は必須な領域です。その中でも、被服構成の立場から体型を捉えることは最も基礎的な課題としていつの時代でも大切なことだと考えます。この分野の研究者の育成とさらなる発展が望まれます。今後、ますますの被服構成学部会の発展と、部会員の皆様のご健勝をお祈りいたしますとともに、これまでのご厚情に厚く御礼申し上げます。

平成 28 年度 被服構成学部会 総会

日時：平成 28 年 5 月 28 日（土）

場所：金城学院大学

平成 28 年度被服構成学部会総会は、川端博子副部会長の司会により下記の通り進行した。

総会次第

- | | |
|---------------------------|-------|
| 1. 開 会 の 辞 | 川端博子 |
| 2. 部 会 長 挨 拶 | 大塚美智子 |
| 3. 議 長 選 出 | 山本泉 |
| 4. 議 事 | |
| (1) 平成 27 年度事業報告 | 森下あおい |
| (2) 平成 27 年度会計報告 | |
| ① 平成 27 年度収支決算報告 | 中村邦子 |
| ② 平成 27 年度夏期セミナー会計報告 | 伊藤海織 |
| ③ 平成 27 年度貸借対照表 | 中村邦子 |
| (3) 平成 27 年度会計監査報告 | 鳴海多恵子 |
| (4) 平成 28 年度事業計画（案）について | 中村邦子 |
| (5) 平成 28 年度夏期セミナー（案）について | 鈴木明子 |
| (6) 平成 28 年度予算（案）について | 葛西美樹 |
| (7) 部会規約改正（案）について | 大塚美智子 |
| 5. 議 長 解 任 | |
| 6. 報 告 事 項 | |
| (1) 科研について | 大塚美智子 |
| 7. 閉 会 の 辞 | 川端博子 |

上記の議事について審議し、承認された。

平成 28 年度 被服構成学部会夏期セミナー

アパレル人材育成を目指した小・中・高・大学のものづくり教育の方向性

日時：平成 28 年 8 月 24 日（水）・25 日（木）

場所：グリーンヒルホテル尾道（広島県尾道市東御所町 9-1）、コンテックス株式会社（愛媛県今治市）他

プログラム

8 月 24 日（水）	
12:30～	受付（3F・ボンシェール）
13:00～13:10	開会の辞
13:10～14:50	話題提供（各 20 分） <ul style="list-style-type: none"> ・「生活デザインの視点から見るアパレル教育」 滋賀県立大学教授 森下 あおい 氏 ・「みる・かく・つくる de 人づくり」 比治山大学教授（広島大学名誉教授）若元 澄男 氏 ・「高校家政科におけるものづくりを通じた人材育成について」 広島県立海田高等学校教諭 中村 里佳 氏 ・「地域と学校教育を学ぶアパレル人材教育について」 立花テキスタイル研究所 齋藤 知華 氏・新里 カオリ 氏 ・「小・中・高等学校における布を使ったものづくりの学習内容と課題」 東京学芸大学名誉教授 鳴海 多恵子 氏
14:50～15:05	休憩
15:05～16:35	パネルディスカッション
16:35～16:45	休憩
16:45～17:35	まとめ（各 10 分）
17:35～17:45	総括
18:30～	懇親会 会場：グリーンヒルホテル尾道
8 月 25 日（木）	
8:30～	尾道駅前出発（貸し切りバス，しまなみ海道を經由）
10:00～	コンテックス株式会社（愛媛県今治市宅間甲 854-1）着 <ul style="list-style-type: none"> 講演「今治タオル奇跡の復活ー地域再生とブランド戦略ー」 四国タオル工業組合理事長 近藤 聖司 氏 講演後工場見学
12:10～14:00	タオル美術館（愛媛県今治市朝倉上甲 2930）見学・館内にて昼食
14:00	閉会の辞
15:30 頃	新尾道駅前解散（途中 JR 今治駅，尾道駅経由）

生活デザインの視点から見るアパレル教育

滋賀県立大学 森下あおい氏

森下あおい氏は、日本人女性の体形と服飾デザインの関係について、絵画や写真資料を基に、江戸から明治時代の女性の着物の着衣形態と体形の分析をされ、対象を現代へと繋げ日本人女性の体形変化と服飾デザインの構成要素を見出し、着衣形態に表される人の感性を定量的に扱う手法の確立を目指す研究をされている。また、地域の素材を用いた衣服デザインの検証と開発を行っている。さらに2003年には、日本産業デザイン振興会グッドデザイン審査委員長特別賞を受賞されるなど、デザイナーとしても数多くの成果を上げている。そのような感性豊かな先生のお話に参加者全員が聞き入った。

今回、夏期セミナーの話題提供として、滋賀県立大学でのアパレル教育の内容について、学生はどのようにデザイン教育を学び、教員はアパレル教育を実践しているのか、授業の組立て方をより具体的にお話いただいた。



滋賀県立大学は、彦根市の、琵琶湖近くにあり、環境に恵まれた場所であるとのことで、その土地で教育できることを考えて、地の利を生かした教育内容となっていることが一連の示された写真から感じる事ができた。

冒頭では、「アパレル」という言葉が1970年代に産業復興を促すために「衣服」を「アパレル」に改称された経緯についてお話があり、それ以降現在までの「アパレル」と消費の変化について、ものづくり工程のデジタル化、生産システムの変化、それまでと違ったファッションの品質などの点から説明があった。

続いて、滋賀県立大学生活デザイン学科の内容紹介がされた。選択必修で服飾・住居・道具の中から必ず2分野をとり、最終的にゼミで分かれるが3分野共に取っていくとのことであった。製作そのものは少ないが、広い視野と柔軟な発想力を育て、作り手側の視点と、生活者側の視点の交わった部分が生活デザインの学びが育てる部分であり、両方の感性を持った人材育成を目指しているとのことであった。

2年次「服飾デザイン演習」のレポート課題：アパレルと消費に関する学生の問題意識を通して読み取れたことは、低価格の影響のためか、長く愛される服を作ろうとする理念が感じられない、消費者は1枚を大切に着ないととのことであった。一学生のレポートが紹介され、「服に関して今の時代、個性を求めることが少なくなっている。値段が安く手軽に着こなしができて、まわりから浮かないファッションが支配している。」というものであった。

このことは、都会の学生にも共通しており、最近の「悪目立ちしないファッションを選ぶ傾向」と近似した主張となっていると感じた。これに対して森下氏は、「着ることに対して、楽しむ、作られたものに対して愛情を持つ、問題に対してともに考える。」必要性を強調されており、このような姿勢を教育していくことが被服分野教育の大切な基盤であると考えさせられた。

「服飾デザイン演習Ⅲ」2コマ15回（2015年28名、2016年22名）では、生活に身近なデザインに取り組む為に、コミュニケーションからデザインを生む—農作業着をデザインする、普段の生活から大事なものを発見—2015年：帆布を用いた靴と服、2016年：湖畔で散歩する時の靴と服などのテーマで授業を行っているとのことで学生作品が写真で紹介された。

最後に、生活デザインの立場で重要なことは、「生活空間全体を視野に、人間とモノとの在り方から服を考える」、「作り手と生活者の双方の立場から、現実と遊離しない服の価値を作る」、「ごく普通の思いを見つめ、豊かな生活とは何かを考え、服づくりを行う」と結ばれた。（記録 中村邦子）

みる・かく・つくる de 人づくり

-3H 美術教育の視点を基底に-

比治山大学 現代文化部 子ども発達教育学科 若元 澄男氏

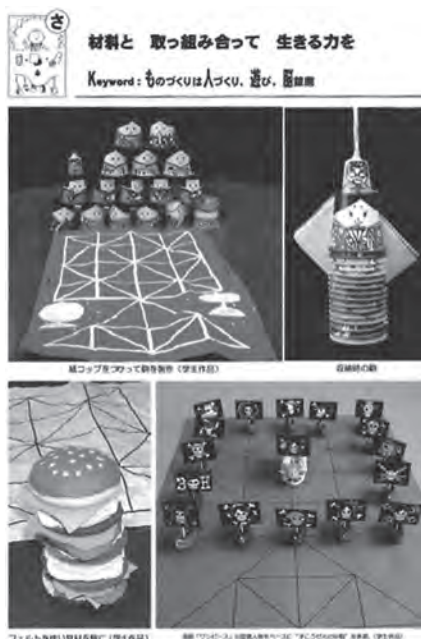
“美術による教育”，“ものづくりは人づくり”等の文脈は，40有余年の美術教育へのかかわりを通し，現在は先生の確信となっている。また，美術教育に対して常に熱い情熱を注がれている。美術と家庭科は，受験に直接関係しない一方で，人の成長，発達のために重要な教科としての共通点もあり，経験豊富な先生から非常に興味深いお話を拝聴することができた。

“3H美術教育のススメ”は従前から先生自身が主張の中核においてこられた。“3H”とは，Heart は心（感じる力），Head は頭（考える力），Hand は手（みる，かく，つくる力）で，三者の関係において，すべてがHeart のワクワクドキドキから始まることを意味するもので，「好きこそものの上手なれ」，「自己学習力」，「内発的動機」などに通じている。

美術教育において，マニュアル化された指導法が効果的でないとする，“基礎”，「基本」とは何か。「基礎」，「基本」をどのように学ばせればよいのか。基礎的・基本的な能力とは，育成すべき能力のことであり，それは一人一人の子どもの発想や構想に繋がっている。それぞれの能力は，他者や教材との対話を重ねながら，社会，自然や環境などの中で活動することによって生まれてくる。

美術（ものづくり）教育の営みは，全面的に脳に依拠したものであるとともに，“みる・かく・つくる”営みすべてが脳の働きなくしては成立しない。“美術教育”のみならず“人”の営みすべては“脳”の所産とも言える。“脳づくり”こそ明るい未来のキーコンセプトであると確信しており，よりよい脳の育成を求めるところこそが今美術教育に求められている最も重要な理念である。

3つのHが，有機的に作用し合う時こそ，人は“磨かれる脳”を想起できる。“ものづくり（美術）教育”は，“人づくり”に貢献し，それが“未来づくり”につながる文脈は是認されてしかるべきと考えられている。



日夜，“脳”を育てる美術教育を追い求め，先生は精力的に活動されている。“大きなお世話的支援”から脱却し“美術（ものづくり）環境を縁の下で準備する支援”により「脳」を育てるといったクールな美術教育の構築に転換することを昨今切望されている。

一方，明るく楽しくクリエイティブな授業ができるように，義務教育の生徒に題材準備，環境を整えることが大切であると考えている。なぜ，図画工作という教科が学校にあるのか，子供たちにとって必要なのかを考えさせ，教科の特性を生かした教育をすることが大事にされるのである。

図画工作のような感性が必要とされる教科は，自分流を大事にし，素晴らしい教科であると教えることも大切である。

子ども達が，喜び，楽しみながら，人としての生きる力を自ら獲得していく美術教育を創ることが最大の願いである。

(記録 十一玲子)

高校家政科におけるものづくりを通じた人材育成について

広島県立海田高等学校 教諭 中村 里佳氏



高等学校家庭科教諭としての経験をもとに、特に現任校である家政科における人材育成について講演をいただいた。講演の前に、会場入口に展示された十二単と狩衣を間近で見て、その美しさに心をひかれると共に、この衣装の製作を指導する中村先生の熱意が伝わって来た。中村先生の赴任校 広島県立海田高等学校家政科は、豊かな生活を創造する資質と職業能力の育成、積極的な行動力のある生徒の育成、社会の変化等に適切に対応できる基礎学力を付け「将来のスペシャリスト」として、社会の発展に貢献できるような人材の育成を目標としている。スペシャリストとなるために様々な学習や行事の体験、特に、全国高等学校家庭科技術検定の資格取得では、被服製作(和服・洋服)、食物調理の3種目すべてで1級に合格する「三冠王」を目指している。先生はこの技術検定によって育まれる資質・能力として、①基礎・基本の定着 ②「段取り力」・「忍耐力」・「集中力」等の育成 ③協働の学びによる集団の醸成を挙げていた。具体的には、将来のスペシャリストの育成に繋がる基礎的な技術を、高等学校段階で身に付けるべき1つの指標と捉え、これをクリアすることにより生徒が「できる自信」を持ち、自己肯定感が高まるほかに、「さらに高い目標へと進みたい」という意欲の向上、友人と励まし合い支え合って作業ができるようになると話され、技術検定を人材育成の柱に位置付けていた。さらに、検定で得られた基礎技能を土台にして、各種コンテストや中世の衣装製作へ挑戦するなど様々な取り組みが紹介されたが、中でも「全国高等学校総合文化祭2016ひろしま総文」でのファッションショーの内容は目を見張るものがあった。この活動を通して「作品づくりの中で他者を意識できるようになった。」「明確な目標をもつことで、物事をやりきろうとする意欲と姿勢が養われた。」「つくりたいものを創造的に作るためには基礎的・基本的なスキルが必要であることを理解した。」と生徒たちに変化が見られたそうである。先生は一貫して、生徒が「自ら考える」「目標を明確にする」活動を重視し、生徒自身が意義を見出すことに重点を置いて指導にあたり、生徒の成長とスペシャリストの育成に努めていらっしゃる。主体的な学びによって生徒の理解が深まり、成長していく過程を見てこられた話には説得力があった。改めて教師の指導力が生徒の様々な能力を開発するのだと実感した。中村先生のご指導の下、ものづくりに取り組む高校生が、将来、アパレルの貴重な人材となることを期待してやまない。

(記録 葛西美樹)



地域と学校教育を結ぶアパレル人材教育について

立花テキスタイル研究所 デザイン制作 齋藤智華氏

研究所のある立花は、向島の地域名で、長寿の地域である。研究所の前身は、向島の帆布工場からのバッグ製作会社であり、綿花を自分で育てることから始まり、染料も自分たちで作り、3年前に独立されたそうである。

会社のスタートは、尾道のものを使ったものづくりにこだわったところから始まった。他の会社と違うところは、地域で厄介とされているもの、不要なものを積極的に使って布地を作っていることだそう。

まず、綿花栽培は、地域の賛同者の協力を得て、耕作放棄地を利用し、綿花と藍を作り、そして地域資源を活かした天然染料・顔料の開発を行っている。例えば、地域から出る間伐材（フルーツの剪定した木屑）を染色材料にしたり、造船所の鉄板を磨いた時に出る鉄粉を鉄媒染との染色用助剤やのりと混ぜてプリント用顔料にしている。また、特産である牡蠣の殻は、高温で焼成して染料の発色剤や自然の藍建て用助剤にしている。最初は色の綺麗さを追及していたが、輸入コストがかかり世界経済の影響を受ける外国産の天然染料を止めて、優しい色で輸送コストや環境負荷が小さく自立したものづくりが可能であることから、地域の特性を活かしたものづくりをしようと考え、廃棄物を使用したり、地域住民や企業の協力を頂いたそう。尾道には多くのものがあり、それらを見つけるのが楽しいとおっしゃった。

具体的な事例として、次の8点を挙げて説明された。①種まき：毎年5月に種まきのワークショップを無料で開催。綿花栽培の知識と綿花の種をお渡しするかわりに、マルチを敷くところから、畑作りを参加者の方にお手伝いして頂く。知識と労働力の交換。②棉見会：今年7月に棉見会を無料で開催。綿花の花を観察し、畑でスケッチをした後、一品持ち寄りBBQをした。綿花栽培の情報交換と交流の場。③秋の収穫祭：10月に棉の収穫とコマによる糸紡ぎ体験を実施。自社の畑で綿を収穫、種とり、コマづくり、糸にするまでの体験。子供や初心者を対象に。④本格糸紡ぎ体験：1泊2日で本格糸紡ぎ体験を実施。種とり、しのづくり、チャルカによる糸紡ぎ、双糸づくり、かせづくりまでを学べる内容。中・上級者向け。⑤RCCラジオとの連携：2013年4月よりRCCラジオとの番組パーソナリティとなる。「コットンプロジェクト」と題して、社屋の屋上で綿花栽培をしたり、栽培の様子や情報、その他のスローライフについての情報を伝える。10月には『フードフェスティバル』というイベントで糸紡ぎ体験教室を無料で開催。⑥月例織りワークショップ：毎月1回織りのワークショップを開催。織り機は自社で開発したフレーム織り機を使用。従来の経糸はりが簡単にできるように改良。⑦企業や地域団体との連携：広島、岡山県内のギャラリーやアパレルショップ、観光農園とのコラボレーションでワークショップを開催。各企業の顧客と触れ合うことで、認知拡大を図る。⑧教育機関：広島県内の幼稚園・小学校・中学校・大学などへ出前授業を実施。未来を担う子供たちを対象に、糸紡ぎや植物染めなどの体験教室を行う。

これらのワークショップの効果は、収益の増加、企業PR、販売促進、認知拡大はもとより、未来の人材の育成として、大学を出てすぐに社会人になるのではなく、その間のワンクッションとしてインターンシップを30人以上受け入れている。その結果、4人が尾道で就職しているそう。現代は他者とコラボしたとき、ネット社会の弊害もあり素材に触れていないので、素材を知らないことが多い。ライフスタイルの変化により、今の子供たちは家庭での体験が少ないため、ワークショップで植物の視点からものづくりを少しは教えられるのではないかと。70%以上廃棄される世の中で、つくることに消極的にならないように物をつくることをどこかで教えたいと言われ、我々もそうありたいと痛切に感じた。

(記録 原田妙子)

小・中・高等学校における布を使ったものづくりの学習内容と課題

東京学芸大学名誉教授 鳴海多恵子氏

家庭科における衣生活領域の内容を大きく分けると、着方、手入れ、製作の3つの内容に分けられる。これを小学校から高等学校まで‘スパイラル’すなわち前後の校種の学習内容を重複させながらさらに発展させ専門性を深めていくという考え方で学習指導要領は示されているはずである。しかし、製作に関しては‘サークル’、同じところをぐるぐる回るかのように、小学校から高等学校に向けての学習の展開が見えにくい。鳴海先生は冒頭でこのように述べられた。そして、小・中・高校の製作学習の内容と教育現場における課題を解説され、今後のアパレル人材育成につながる専門教育の指針を示された。

小・中・高等学校の学習内容と製作教材

小学校の製作題材は「生活に役に立つ物」。児童自身が生活課題の中から製作する物を決め、製作計画を立て、作品完成後は生活の中で活用する。用具の種類と用途理解に始まり、手縫いの基本とボタンつけ、ミシン縫いも含まれる。しかし、ミシン指導に対しては、苦手意識を持っている教員が多い。課題としては玉結び・玉どめが定着していないこと、左手で布を持ち右手に針を持って連動させることができない、手指の巧緻性の低下などを挙げられた。中学校の学習内容は日常着の手入れの補修技術としてまつり縫いが扱われているが、学習時間が少ないため、定着率は低い。手縫いの玉結び・玉どめ・なみぬい、返しぬい、ボタンつけなどの小学校の振り返りとミシンによるほころび直しに加えミシンの点検・調整も含まれる。製作の題材は「生活を豊かにする衣服や小物」。作品例はハーフパンツ、道具入れ、ペットボトルカバーなど、衣服のリフォームやリメイクも扱われる。高等学校は共通教科の『家庭総合』を例にして話された。学習題材は小・中学校における基本的な学習を踏まえて実験・実習を通して科学的理解を深めることに重点が置かれている。学習指導要領の製作題材は「衣服」を中心に扱うこととしているが、実際の教材例は、エプロン、基礎縫い、バッグ類、パンツ類と小学校・中学校と同じものが扱われていることが多く、衣服以外の題材やミシンを使わない教材が多くなっている。

ものづくり学習の課題

鳴海先生は「単に技能が低いことを憂いているのではなく、学習したものづくりの知識や技能が確実に定着していないことがいろいろな課題を派生させる根源となっている。」と論された。先に‘サークル’と表したように、同じことの繰り返しでは小・中・高校の系統学習が実現できない、発達段階に応じた学習が実現できない、高校などで科学的理解を深め衣文化の伝承と創造につながらない、生活および社会活動に生かす実践力につながらない、資質・能力向上への積極的意欲・関心につながらない等の課題を派生する。このような状態では、ものづくり学習に存在意義があるのかと社会的批判を受けても反論できない。学習成果があればこそ大切だと主張できる。さらに、ものづくり学習の意義そのものが問われるひとつの例として「最近、出来上がり線・裁ち切り線の印刷してある市販教材を使った授業が多い」ことを語られた。こども達の失敗を避けるため、できるだけ作業が早く進むように、完成させることのみ、学習目的とする指導がされている。このような思考の伴わない学習で子ども達に何の力が育まれるのか。考えるということがあってこそ更に技術が定着して行く。私達が携わるものづくり学習で何ができるのか、何を学ぶのか、どのように学ぶのが重要な観点となる。私達は肝に銘じて考えて行かなくてはならない。

(記録 田中早苗)

パネルディスカッション

各先生方の話題提供の後、アパレル人材育成を目指す教育に何が求められるのか、それを担う小・中・高・大学の連携の在り方について、フロアを含めた意見交換や質疑応答の形でパネルディスカッションが進められた。

まず、フロアからはものづくり教育において「創造性を育む」ことと「基礎、基本を習得させる」といういずれも重要であるが一見相反する両者の関連について質問が多く挙げられた。

これに対し、先生方は創造性を育む中で、基礎・基本の重要性とそれにとどまらないさらに深い内容にまで気付かせる授業を実践されていた。例えば、中村先生は、基本の反復だけでは楽しみがないため目標を定めステップアップする中で生徒の目を輝かせる工夫をされており、森下先生は日常生活をしっかりとらえたデザインへの取り組みから文化や社会など大事なものがみえてくると、生活デザインの意味を強調された。

「創造性を育む」授業のためには小・中の教員の技能向上が課題ではないかとの質問に、鳴海先生は負のスパイラルに陥っている現状に対し、子供たちの意欲関心を高め自信をつける授業開発のためには、地道な積み重ねで質の高い教員養成をするしかないと述べられた。

「創造性を育む」ために「楽しい授業」がキーワードとして取り上げられた。若元先生から義務教育の段階では生徒の創造性やオリジナル性を育てるために、ワクワク感のあるマニュアル化しない指導法の重要性が説かれた。しかし、そのような授業ができる教員養成の授業において、学生は悲鳴を上げるとのことであった。この点については他の先生方も共通認識をもっておられ、「楽しい前に苦しい思いをさせる」「決して妥協はしない」「目標を少しずつ高く」「ゼロからの発見、達成感を感じさせる」など、ただ受動的で安易な楽しさではなく、できるようになる喜びや発見する楽しさに気付かせる「楽しい授業」のために様々な仕掛けをされていた。

齋藤先生の取り組みは学校教育とは異なり、失敗を失敗とせず技術に重きを置かないで布を扱う楽しさを教えられるとのことであった。しかし、実際に素材に触れさせて身近に貴重な材料があることや、多くの衣服が廃棄される現状に気付かせたいとの思いは学校教育と共通するもので、地域や企業との連携の重要性に気付かされた。

その他、フロアから地域連携の取り組みの紹介などがあり、子供たちのものづくりに対する可能性がうかがえた一方で、いわゆる私立の家政科において家庭科の教員希望者が減少している悩ましい現状にも話が及んだ。

さらに、今回の学習指導要領の改訂にかかわってこられた広島大学の鈴木先生からその方向性について説明いただいた。今までのようにどのような内容を教えるかではなく、何ができるようになるかが重要で、家庭科では他の教科にはできない資質能力を育てる必要がある。手法として、アクティブラーニングが注目されているが、ただ手を動かせば良いのではなくそこに深い学びが求められているとのことであった。

最後に先生方が述べられたまとめを総括すると、次のようなことがいえる。まず、今回のテーマの中の「アパレル人材」とはアパレル企業に就く専門家だけではなく、アパレルを活用する者も含むととらえられ、高度な技術も大事だが、その前提となる創造性、思考力や協調性、いわば人間力を育てるためには、ものづくり教育は欠かせない。そして、なぜ学ぶかが大事で、家庭科は生活の全てにかかわる大事な教科であると心から教員が思えば、生徒、学生はそれに応え、教員希望者も増えるのではないか。負のスパイラルを断ち切って、さらに地域、企業や家庭など横の連携も含め、いろいろな機会にこのような議論を発信していかなければならない。

まとめの中で鳴海先生から、少ない時間でいかに効率的にやるか、現場の先生方が苦慮しながらも取り組んでおられる現状も紹介され、その中で「子どもの可能性はまだまだ引き出せる。」との力強い言葉があり、希望の光が見える気がした。その可能性を引き出すものづくり教育の意義を改めて認識させられた。（記録 森 由紀）

講演

今治タオル奇跡の復活

—地域再生とブランド戦略—

四国タオル工業組合理事長 近藤聖司氏

高品質なタオルとして有名な「今治タオル」であるが、衰退し危機的状況に陥っていた時期がある。今回のご講演は、その窮地からの奇跡の復活についてと、企業が求める人材とその教育についてである。

今治は日本最大級のタオル生産地として成長を続けていたが、1991年のバブル崩壊に伴い生産数は一気に下降し、2006年にはピーク時の1/5まで低下した。バブル期の主力はOEMによる海外ブランドのライセンス商品であったが、メーカーから薄利な生産を強いられ利益率も減少し続けた。これに伴い、大手企業の海外への拠点移転や倒産が相次ぎ今治は衰退した。この状況の打開策として始められたのが「今治タオルプロジェクト」である。

2006年に中小企業庁の「JAPANブランド育成支援事業」として採択されたことを機に、クリエイティブディレクターとして高名な佐藤可士和氏を総合プロデューサーに迎えた。佐藤氏が行ったのは、今治タオルの価値を見えやすくするブランディングである。まず、良質な点を「吸水性」と「安全性」の2つのみに絞ることで品質の特徴を明確にした。組合独自の高い品質基準に合格したタオルのみを「今治タオルブランド」として認定し、オリジナルのブランドマークとロゴを付ける事を許可した。また、PRに使用するタオルの色は白に統一された。白は業界では安っぽい色として位置づけられていたが、白を基調色とすることで清潔さと上品さのイメージを植え付けることに成功し、今では生産数の6割が白となっている。当初この取り組みに賛同したのは9社のみであった。これは、多くの企業がライセンスブランドにより経営難へと追い込まれた経緯があったため、ブランド化を謳う今回の案に期待できなかったのである。しかし、今治タオルの注目度と共に賛同者も増え続け、今では四国タオル工業組合の90%である95社が加盟している。

このように地域再生の際には、初めは誰かに頼ることもある。しかし、その後は自分たちで作り上げる意識が重要であると近藤氏はおっしゃっている。ご自身の会社では、このマークのみに頼ることなく、自社ブランドの商品開発に力を注いでいらっしゃる。大量生産では不可能な付加価値のある商品を数多く生み出し続けることで、今では海外マーケットに進出するまでに発展なさっている。このような発想豊かな事業展開を行い続ける近藤氏に、企業が求める人材についても語って頂いた。①ルールが守れる、②コミュニケーション能力がある、③多様性を持っている、④自分の引き出しが多い、⑤ものの見せ方が分かる、⑥潮目を掴み良いうちに次の準備ができる、⑦一つ上のフェーズを目指せる人。そして、何よりも「情熱と本気度」を持った人材を求めているとのこと。

人材の育成については、高級カシミア製品（ブルネロ・クチネ）により復興を遂げたイタリアのソロメオ村を例に、「自分たちの村は自分で立て直す事」の大切さが語られた。今治でも、地域の学生との交流活動や、技術と文化の習得を目指した学校教育など、自分たちの手による新たな取り組みを展開し始めていらっしゃる。

このように今治は、生産内容に見合った利益を得られる豊かな産業へと復活したことで、そこに暮らす人々も今治に誇りを持ち改革を恐れない体質へと変化し続けている。また、今治タオルの周知度の高まりは国内外の観光客増加にも繋がり、町全体が活性化した。このような復活を体験なさった近藤氏からの最後の言葉は、「これからの日本は、地方都市が元気になることが大切である」であった。日本には、今治のように素晴らしい技術がありながら衰退の一途を辿っている産地が数多く存在する。この日本のもの作りの素晴らしさを継承するためにも、技術と発信力を統括的に教育することの重要性を今一度考えさせられる貴重な機会となった。（記録 角田千枝）

見学会「タオル美術館」

金城学院大学 伊藤海織

天候に恵まれ、しまなみ海道の美しい景色を楽しみながら今治に向かった。コンテックス株式会社で四国タオル工業組合理事長の近藤聖司氏のご講演を聴講し、工場とショールームを拝見した。工場ではほとんどの工程が自動化され、無人に近いような状態であったことにとっても驚いた。ショールームではスタッフの方々が丁寧に商品説明をしてくださった。またお見送りのたくさんのスタッフの方が出てきてくださり、心温まるご対応をありがたく思った。



その後、バスで移動し、タオル美術館を見学した。美術館入口の「コットンロード」には、タオルの原料である綿を使った巨大なアイスクリームやケーキなどのオブジェがあり、目を楽しませてくれた。入るとタオルの生産工程が機械とともに展示されていた。ジャガード織機による精細な絵柄やエンボス加工で多彩なデザインが可能であると知ることができた。次に壁一面にチーズ染色の糸が飾られていた。ランダムな配色であったが、糸の持つ温かみによって派手さがやわらげら

れ、素敵なインテリアとなっていた。その後、「ムーミンの世界」「マタノアツココレクション」「キャシー中島のハワイアンキルト」など、それぞれの世界観に浸りながらの観覧となった。ショップでは40色に展開されたタオルがカラーパレットのように配され、それも展示のようであった。タオルガーデンでは緑にシャワーのような雨が降り注ぎ、美しい緑を楽しませてくれた。



夏季セミナーに参加して

ー現場を知る大切さー

広島女学院大学 檜崎 久美子

平成28年8月24日、25日に広島県尾道市と愛媛県今治市等において、被服構成学部会公開夏期セミナー「アパレル人材育成を目指した小・中・高・大学のものづくり教育の方向性」が開催され、私はこの度初めて参加させていただきました。

1日目はグリーンヒルホテル尾道を会場に、大学教授や高校教諭、企業の方がそれぞれのお立場から、ものづくりやアパレル教育、人材育成などをテーマにお話くださいました。私は大学で家庭科教員を養成する立場として、また、デザインを扱う学科の教員として皆様のお話を聞いておりました。

どの方のお話も興味深かったのですが、特に印象に残っているのは広島県立海田高等学校教諭の中村里佳氏のお話でした。当日は海田高校の生徒が制作した唐衣裳などの衣装展示もあり、中村先生が多大な熱意と確かな技術をもって生徒指導にあたられ、生徒のものづくりを大いに支えておられる様子に大変感動しました。そして、このお話を受けて、家政系の高校でもものづくりを経験した生徒が大学に進学した際、それを活かして学びを深め、社会で活躍するところまで成長させるためには大学がどのように受け止めればよいのか、教員はどのように手助けできるだろうかと自身を振り返るきっかけになりました。

2日目は尾道からバスに乗り、しまなみ海道を通過して四国は今治へと参りました。現在ではブランドタオルとして有名な「今治タオル」ですが、一時は産地が崩壊するほどの危機的状況にあったところから、どのように復活していったのかを四国タオル工業組合理事長の近藤聖司氏よりご講演いただき、工場見学をさせていただきました。

商品として販売されている今治タオルについては知っておりましたし、そこにクリエイティブディレクタ

ーの佐藤可士和氏関わっていたことも別の機会に耳に挟んでおりました。ですが、近藤氏のお話を聞いて、今治のタオル業界の方々に素晴らしい技術力や生産力があるからこそブランドとして成立したということがよく分かりました。そもそもが良いものでなければ、佐藤氏の力だけでは成り立たなかったということです。海外から輸入される安い製品や、高級ブランドのマークをつけただけの商品とは違う、タオルとして確かな機能が確立しているからこそ、今治タオルが世の中に広まり、受け入れられたのだと実感することができました。

近藤氏が経営されている会社の工場見学の際には、自身が携わるものづくりへの誇りを抱いて働いている若い社員さんも見受けられ、こうやって伝統や熱意は引き継がれていくのだな、と教育現場だけではわからないものづくりのリアリティも感じることができました。さらに、工場見学後に見せていただいた販売スペースも兼ねたギャラリーでは、タオルだけでなく、タオル地を活用したアパレル製品や関連商品が置いてありました。それを見ることで、ものづくりとは単なる商品を生み出す技術的な側面だけでなく、日々の暮らしの中で今ないものを生み出すためには、家政学的な発想力や応用力、デザイン力も必要であり、そういった視野の広い学生を育成できればアパレル人材として活躍する可能性はあるのではないかと、自身の教育環境の実状にも置き換えて具体的に考えることができました。

2日間、実行委員としてもこの夏期セミナーに関わらせていただき、本当に多くの先生方と交流をさせていただきました。特に教育について沢山の事例を伺うことができ、大変勉強になりました。本当にありがとうございました。

平成 28 年度 公開研究例会

「世界市場で評価される日本の伝統的染・織」

平成 29 年 3 月 8 日（水） 於：京都女子大学

講演 1

西陣織の技術を掲げ世界市場へ

～伝統産業からクリエイティブ産業への革新～

株式会社細尾取締役、12 代目 細尾真孝

はじめに

細尾は元禄年間に織物業を創業した西陣織の老舗である。人間国宝作家の作品や伝統的な技を駆使した帯などの和装品に取り組んできた。しかし、西陣織のマーケットはこの 30 年でピーク時に比べ 10 分の 1 へと縮小。そこで新しい可能性を求めて海外進出を目指し、今ではラグジュアリーなファッションブランドやインテリアメーカー、現代アート作家とのコラボレーションが世界から注目されるようになった。

西陣織には 1200 年もの歴史がある。今でこそ帯の印象が強いが、そうになったのはここ 100 年のこと。それ以前の主な客層は天皇、貴族、将軍家、豪族など、ドメスティックのアップ層。そういう方たちの依頼に合わせたお誂えの織物を織り続けてきた。それが西陣織のバックグラウンドである。お金にいとめはつけないから、ひたすら美しいものを作りなさい、というミッションのもとで作っていた。

西陣織の歴史

西陣織は先染めの紋織物で、織り上がるまで 20 もの工程があり、京都の西陣といわれる 7 キロメートル圏内にそれらの工程を担う職人さんがいる。代々箔を貼る「箔屋」さんは、和紙の上に金箔をのせ、糸に定着させる。それを「カッターさん」と呼ばれる職人さんが、細かく裁断する。そして、それを糸として織物に織り込んでいく。今はギロチンのような刃で切っているが、昔は刀で手切りしていた。20 工程それぞれにマスタークラフトマンがいて、職人さんとの連携がなければ西陣織はできない。金糸を使う金襴や、貝殻を細かく切って螺鈿のように織り込む技術など、宝飾的な要素が西陣織にはある。昔の人はジュエリーを身にまとう文化はあまりなく、どこで差別化するかというと、着ているものの素材だった。また、縦糸が 9000 本あるが、どう縦糸を入れ、どう横糸を入れるか、1 本 1 本をコントロールできるので、特殊な素材のものを織り込むこともできる。西陣織は、建築家が構造計算しながら建築物を作るのに似ている。糸が立体的で、世界でも類をみない複雑な構造体である。

設計図のことを「紋」という。昔はすべて手作業で紙に描いていたが、今はコンピュータで行っている。コンピュータになったことで、修正がききやすくなった。織機は機械だが、オートマチックというわけではない。各織機に職人がつき、手の延長で機械を使うという感じである。

海外進出のきっかけ

着物がなくならないにしても、マーケットが縮小していくにつれ、存続が危ぶまれるような状態だった。職人の高齢化が進み、場合によっては工程が欠ける心配もあった。うちの本業は着物や帯で、それを全国の着物の専門店や百貨店に卸していたが、今後はそれだけではだめだと思い、海外に目を向けた。最初に出品したのが、2006年のパリのメゾン・エ・オブジェ（世界最高峰のインテリア・デザインの総合見本市）だった。ソファに西陣織の生地を貼って展示したのだが、そこで問題が生じた。西陣織の幅は基本、32cm。ソファだと継ぎ目が出でてしまう。翌年は、ヨーロッパの需要と継ぎ目問題を考慮してクッションを出品し、香港のレイクロフォードとロンドンのリバティからオーダーがあった。世界に名だたる高級デパートからの依頼は自信につながったが、1軒100万円ほどの売上だと継続していくのが難しく、事業としては成り立なかった。

私はそれまで家を継ぐつもりがなく、高校時代から音楽活動をした。ただ、音楽だけで食べていくのは厳しくて、自分たちで新しい音楽の分野を作れないかと、ファッションやアートとの融合などを試みていた。ただ経営者になるには、マネージメントを学ぶ必要があると感じ、大手ジュエリーメーカーに就職して、生産管理や商品開発などを担当した。そんな時、父から海外進出を志していると聞き、西陣織を海外に発信していくのはおもしろいかもしれないと思ったのである。

ルーブル宮国立美術館などでの展示

伝統的な琳派の流れでの紹介だったが、ルーブル宮国立美術館では本業である帯を展示した。展覧会自体が非常に好評だったため、巡回展になることになり、翌年の5月にはニューヨークで開催された。展覧会の終了と同時に、世界的な建築家であるピーター・マリノ氏から連絡があった。展覧会で帯を見て、西陣織の技術を使ってテキスタイルの開発を依頼したいと。鉄が溶けたような、かなりコンテンポラリーな絵が送られてきて、それをもとに織物を作ってほしいということだった。世界中のクリスチャン・ディオールの店舗のリニューアルのタイミングで、上海の旗艦店の壁紙用だった。今まで自分たちはソファやクッションのような商品にしたり、和柄でないと勝負ができないと思ってきたが、そうではなかった。和柄をとっばらったときに、建築の内装材やファッションの素材にもなるなど、素材としての西陣織の可能性が広がった。

ソファを作ったときにもネックになった幅問題。壁紙に使うということは幅が必要である。社内でも意見が分かれたが、150cm幅の織機を開発しようということになった。誰もやったことがない、前例がない、お金もかかる、できるかどうか保証もないと。けれどもやらないと次のステップにいけないことも分かっていた。1年かかったが、世界に1台の150cm幅の織物が織れる織機が完成した。結果、世界90都市のクリスチャン・ディオール店舗の壁面のファブリックを織った。毎年、織機を1台ずつ増やし、現在では6台になっている。

ピーター・マリノ氏が西陣織に求めたもの

ピーター・マリノ氏が求めたのは日本的なものではない。単純にラグジュアリーを求めている

た。常に彼らは世界中をリサーチし、最高峰のものを探している。展覧会で私たちの帯を見て、0.5秒で彼らの感性に刺さったのであろう。西陣織にラグジュアリーを見い出してくれた。普通の織物は平織りだが、西陣織は細い糸と太い糸を混在させることもできる。より立体的、3D的である。また、ピーター氏が言っていたのは、店舗の壁紙に使うということは、その前に商品が並べられる訳だが、西陣織はラグジュアリーさがありながら、商品を引き立ててくれるということ。そもそも、天皇や貴族が好んで身につけていたという歴史のなかで、品格を保ちながら優雅であるという技術が磨かれてきたのが西陣織である。絹なので繊細で切れやすいと思われがちだが、織機で強く織り込んでいるので強度もある。

その後の取り組み

相次いで、シャネルやルイ・ヴィトンの店舗の壁紙の依頼がきた。また、友人を介して、ファッションデザイナーの三原康裕さんと出会い、2012～13秋冬のパリ・メンズコレクションで西陣織のファブリックで作ったスーツを発表された。2013年のミラノサローネ（国際家具見本市）では、音響メーカーのバング&オルフセンとイタリアの高級テーラードメーカーのパルジレリとの3社でコラボレーションをし、スーツとスピーカーを展示した。ホテルでは、ハイアットリージェンシー京都の内装や、ザ・リッツ・カールトン東京のリニューアルでベッドのヘッドボード用の織物の依頼を受けた。

クリスチャン ディオールから依頼がきた時に、それがファッションブランドだということはおわかって、「色はディオール・グレーで」と言われても何のことかわからない。色見本を見て初めて自分たちの言葉に変換できる。しかし、今ではディオールの色、シャネルの色、と職人たちは完璧に使い分けている。マーケットが広がることによって、帯が主流だった時代よりも、職人の仕事にスポットが当たったことは良かったと思う。

社内には職人が10人いて、全20工程のうちの10工程はうちの工房で行っている。2人はベテランの職人だが、残りの8人は20～30代の若手である。今は職人を募集すると10～20倍の倍率で全国から集まる。昔はそんなことはなかった。芸大でアートをやっていたとか、服飾専門学校を出てアパレルで企画を担当していたという人が入社してきた。彼らは西陣織を、クリエイティブ産業として捉えている。

2014年にはアメリカの現代アート作家、テレジータ・フェルナンデスさんが描いた風景画を金襴緞子で作った。2015年には現代美術家のスプツニ子！さんに依頼されて、「バイオテクノロジーと西陣織を組み合わせよう」というコンセプトで、クラゲやサンゴの遺伝子を組み込んだ蚕からできる光るシルクを織り込み、グッチのイベントで光るドレスとして発表された。今度はクモのDNAを使って作ってみようと言っている。スパイダーマンの世界である。可能性は広がっていきく。もしかすると将来的に西陣織で宇宙服を作るかもしれないし、宇宙船の内装を飾るかもしれない。そういう妄想をしては楽しんでいる。

今まで、京都の伝統工芸の世界は横のつながりがほとんどなかった。だが、メゾン・エ・オブジェやミラノサローネで知り合って、日本の伝統工芸を盛り上げていかれたらと、2012年に設立した。自分たちの技や素材を国内外の企業、クリエイターの提供し、今までにない新しいものを生み出していくことを目的としている。自分たちが子どもの頃、サッカー選手に憧れた

ように、「伝統工芸、かっこいい！」と職人を目指すようになってくれたら最高である。

西陣の今後

引き継いでいくためには壊すことも必要だと思う。頭で考えるよりも一度やってみる。パーンッと壊そうと思っても、そう簡単に壊れないのが伝統である。ビルの10階から飛び降りても変な重力があって、バンジージャンプみたいに引き戻される。だったら伝統を信じて、壊すつもりでやったほうがいい。バイオテクノロジーとのコラボレーションにしても、振り幅があればあるほどおもしろいではないか。

今後は西陣全体はもちろん、織物のマーケットを活性化させたい。日本には素晴らしい技術をもった機屋さんがたくさんあるので、ライバルをどんどん作って、お互いに切磋琢磨していきたい。今年のカノサローネで、京都丹後の機屋さん3社とのコラボレーションブランド「tango tango」をローンチした。丹後は1300年も前から着物を作り続けており、素晴らしい技術を持っている。視線を世界に向けた時にチャンスがあるんじゃないかと思っている。日本の織物の文化をこの先、200年、300年と続けていきたい。



プロフィール／敬称略

細尾真孝（ほそお・まさたか）

1978年、西陣織老舗 細尾家に生まれる。大学卒業後、音楽活動を経て、大手ジュエリーメーカーに入社。

退社後フィレンツェに留学し、2008年に細尾に入社。09年より新規事業を担当。

西陣織の技術、素材をベースにしたファブリックを海外に向けて展開し、建築家ピーター・マリノ氏が手掛けるクリスチャン ディオール、シャネルの店舗に使用される。

2012年には伝統工芸を担う同世代の若手後継者とのプロジェクトユニット「GO ON (ゴオン)」を始動。

引用

http://www.recruit.jp/meet_recruit/2016/05/it08.html

講演 2

京都の墨流し染・糊流し染

—その新たな可能性—

京都女子大学 青木 美保子

明治期京都において、墨流し業を営む八木家の三代目八木徳太郎は、着物の生地に施す墨流し染の連続模様を考案する。一方、京都高等工芸学校（現：京都工芸繊維大学）色染科の初代主任教授で後に第二代校長を務めた鶴巻鶴一は、その墨流し染に用いる染料と媒染剤、そしてその使用法を開発した。

この八木と鶴巻が改良した墨流し染は、大正期に鶴巻の弟子の亀井光三郎に引き継がれ、後に糊流し染と称される「改良流し染」の開発につながる。さらにその権利を譲り受けた友禅業の日比野治三郎は、その糊流し染にさらなる改良を加え「マドレー染」と称する独自の染色技術を考案した。

そのマドレー染をもとに新たに開発された糊流し染技法の「流線染」を習得していた菌部正典氏は、昭和期末に新開発の顔料を用いて、また新たな墨流し染の技術を開発した。

現在、墨流し染を京友禅の確固たる技法のひとつとして確立させ現代の名工となった菌部氏は、墨流し染の第一人者として着物業界以外にもアパレル業界他各方面からの注目を集めている。しかし、この系譜のなかの日比野家のマドレー染は、世代交代によって技術が途絶え幻の糊流し染技法となっていた。

そこで、2015年7月に、京都産学公連携機構「文理融合・文系産学連携促進事業」の助成を受けて、染織資料整理活用研究会《糊流し染「マドレー染」の復活における記録と希少染色技法を活かした新たなものづくりの可能性と事業化について》プロジェクト（研究代表者 立命館大学 鈴木桂子氏、研究分担者 京都工芸繊維大学 並木誠士氏・株式会社マドレー 日比野淳平氏・京都女子大学 青木美保子）を立ち上げ、1年間、この染色技術の復活に取り組み、なんとかマドレー染を再現することができた（日比野淳平氏はマドレー染開発者の日比野治三郎氏の曾孫にあたる）。そして、プロジェクト終了後、京都女子大学青木研究室では、この活動を引き継ぎ、株式会社マドレー 日比野淳平氏の活動に協力する形で、マドレー染の事業化に向け、創作活動を行っている。

本発表では、明治期から現代までの京都の墨流し染・糊流し染の系譜を辿ることで、この染色技法が時代に即しながら意匠や技術を変化させつつも伝承されてきた技法であることを提示するとともに、その過程において失われた技術である糊流し染「マドレー染」を復活させ新たな可能性を探る取り組みを紹介する。

おそらく、この糊流し染の技法のひとつであるマドレー染のように、さまざまな事情で失われた染織技術は全国各地にあることだろう。そしてその中には、何らかの仕掛けによって再び現代の人々に感動を持って受け入れられるであろう染織もあるはずだ。このマドレー染復活の取り組みが、他の事例へと波及し、日本伝統の染織、延いては伝統工芸全体の活性化につながっていけば幸いである。

グローバルな高齢化に対応する衣服設計のための

日本人と中国人の体型分析

日本女子大学大学院 張 立娜

1. 緒言

世界的に高齢化が進む中、中国においても高齢者の生活の質をいかに充実させるかが大きな課題となっている。中国の人口は世界70億の人口の20%にあたる14億であり、そのうち60歳以上の高齢者は15%の2億を占めている¹⁾。このことは今後アパレルの国際市場にも大きな影響を与えることとなる。しかし、中国のアパレルにおいて、中高年に向けたファッション性と機能性を考慮した衣服はほとんど提供されていない。また、日本における中国のアパレル製品は、品質が低いとされる傾向があり、その原因の一つに体型適合性の低さが挙げられる。これは日中両国の体形情報が明らかにされていないことに原因があると考えられる。さらに中国では三次元計測データを所有する研究機関はあるものの、三次元計測データは公表されていない。したがって中国人中高年女性の三次元形状の特徴を明らかにすることには大きな意義がある。そこで本研究は高齢社会における日中両国の中高年の体形情報や衣服設計理論を構築し、公開することを目的とした。

2. 研究方法

被験者は日本人中高年女性86名、中国人中高年女性131名と男性100名、比較対象として中国人若年女性56名、計測場所は中国吉林省白山市および日本関東地方である。計測期間は2011年10月から2015年9月、計測項目は衣服設計に関わる33項目である。計測方法はマルチン法に準じた一次元計測およびボディラインスキャナによる三次元計測である。

3. 結果・考察

3.1 中国吉林省中高年の体型特徴と体型意識に関する

分析

中国人吉林省中高年男女 200 名を対象とし、身体計測と体型に関する意識調査を集合法により実施した。中国は広く、南北の気候や食文化が異なるため、地域差が顕著だと考えられるが、分界線に準じ比較すると、南北の男性は平均値間に有意差は認められなかった。また南北の女性の比較では右腕付け根囲、股上前後長の 2 項目に有意差が認められたものの、その他は有意な差は認められなかったため、全データを一括して扱うこととした。

結果、吉林省中高年男女は共に、肥満傾向が認められ、女性は男性より各部位における加齢変化が大きかった。また、中国のサイズシステムである服装号型に本データを適用して体型区分を行ったところ、吉林省中高年男女は B 体型の分布が多かった。さらに男女共に体型への意識は身体計測値と深く関係していることが分かった。

3.2 三次元計測データに基づく中国人中高年女性の体型特徴の分析

日本在住の中国人中高年女性 21 名と若年女性 56 名の三次元計測データを用いて、若年者との比較から中高年女性の体型特徴を詳細に分析し、体型特徴と衣服パターンとの関係を明らかにした。まず、三次元形状の主成分分析により平均形状を作成し、中高年女性と若年女性の体型特徴を比較した。次に、平均形状を仮想人台として、バーチャルタイトフィッティングを行って胴部パターンを作成し、中高年の体型特徴とパターン形状との関係を明らかにした。

さらに、三次元形状の主成分分析により、中高年女性の体型特徴として身体の前左右の傾き、肥瘦度、脊椎の湾曲度の因子が抽出された。図 1 に示す平均形状

によるタイトフィットパターンでは、主成分分析で抽出された中高年女性の体型特徴である身体の傾きは、前サイドパネルウエストから肩にかけての傾きで示され、肥瘦度は前サイドパネルの分量に現れた。

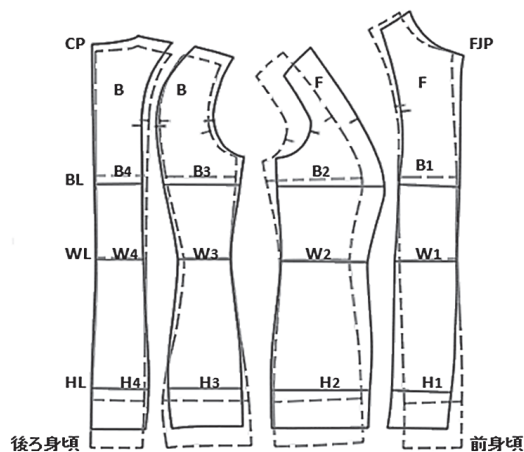


図1 中高年女性と若年女性のタイトフィットパターンの重合図 (実線：中高年女性、点線：若年女性)

3.3 中高年女性における中国人と日本人の体型比較

日中の中高年女性を対象として、一次元と三次元計測データに基づいて、日中の中高年女性の体型を比較分析した。また、三次元計測データから抽出した両国の平均形状について比較し、日中両国の中高年の衣服設計のありかたを検討した。

一次元計測データの分析の結果から、中国人中高年女性は日本人より体幹部の周径が顕著に大であり、体重に対し胴囲が増え続け、同じ体重における胴囲の変化が大であった。両国の平均形状の分析により、日本人中高年女性は中国人より体幹部が細く、下肢が太いことが示された。平均形状によるタイトフィットパターンでは、中国人中高年女性の前身頃のバストラインから上が日本人より長く、後傾傾向を示し、背側部の厚みは後身頃の面積と幅の広さにあられ、両国のパターンの相違が明らかになった。

3.4 三次元計測データからの日中の中高年女性のための上半身衣服原型の新提案

両国の平均形状の寸法で作図した新文化式衣服原型とタイトフィットパターンの値から導出した新提

案の中高年衣服原型とを比較検討し、日中の中高年それぞれに適合する衣服原型作図法を提案した。

その結果、平均形状を展開して採取したフィッティングパターンにゆとり量を加えたフィッティングデザインパターンは平面製図デザインパターンより中高年女性の体型によくフィットし、バーチャルタイトフィッティングの有用性が確認された。同時に従来の製図法では中高年の体型をカバーすることはできないことが明らかになった。

4. まとめ

中国の吉林省中高年男女に対する人体計測と意識調査から、男女共に肥満傾向の体型特徴が認められた。また、三次元計測データを用いた中国人の中高年女性と若年女性の体型比較から、両者の体型差異は大きく、中高年女性は若年女性より乳房が下垂しており、腹部の突出が強く、脊椎のSカーブ消失が顕著であることが分った。また、中国人中高年女性は日本人より体幹部の周径が顕著に大であり、両国の体型相違は大きいことが示された。平均形状を展開して採取したフィッティングパターンにゆとり量を加えたフィッティングデザインパターンは平面製図デザインパターンより中高年女性の体型にフィットすることが確認された。

5. 今後の課題

本研究手法を発展させ、男性や障害がある人などさまざまな身体条件の人のパターンメイキングに応用していきたい。また、ユニバーサルデザインを視野に三次元動作解析システムおよび動作対応パターンメイキングシステムを用いたアジア人共通の中高年の姿勢と動作を配慮した衣服設計法の開発も期待される。

6. 引用文献

1) 中国新聞網, 2013年末中国の高齢者人口は2億を超える, <http://finance.chinanews.com/jk/2012/09-05/4160829.shtml>. (入手日: 2013. 2. 1)

第17回全国中学生創造ものづくり教育フェア 報告

埼玉大学 川端 博子

第17回全国中学生創造ものづくり教育フェアは平成29年1月21日（TOC有明）・22日（新木場JKタワー）で開催された。本イベントは全日本中学校技術・家庭科研究会が主催するもので、アイデアバッグ部門と授業や課外を含めた技術・家庭科の作品コンクール部門など全6部門がある。被服構成学部会は協賛団体として寄付金と「豊かな生活を創るアイデアバッグ」コンクールの審査委員長を送り出し、文部科学大臣省をはじめとする9つの賞の決定にかかわっている。この他、審査に関与しないが、作品コンクールでは2件の奨励賞を贈呈している。

初日のコンクールには、地方予選を勝ち抜いた選手16名が一堂に会して、保護者や教師そしてミシン保守の人たちが見守る中、3時間半、作品づくりに奮闘し、全員が完成した。その後、工夫点や思いを2分間で発表した。選手たちの腕前に頼もしさを感じ、何よりも真剣な取り組みの場に立ち会えることに喜びを感じる。

私を含め審査員4名は、製作レポートに事前に目を通し、製作技能、プレゼンテーションの内容を審査基準に則って採点していく。慎重審議の結果、文部科学大臣賞には村北明日香さんの「5変化員がらハンモックバッグ」を決定した。忙しい母のために入れる物に合わせて変身するよう工夫したバッグで、本体は黒でマチ部分は赤い水玉の布で製作され、デザインの的にも美しい。厚生労働大臣賞、特許庁長官賞と続き、被服構成学部会長賞は8位にランク付けられている。部会長賞には多田啓夏さんの手提げとリュック、ボディバッグとなる「荷物が増えても大丈夫！きんちゃく3wayバッグ」が選定された。内側に定期券、携帯電話や財布、折りたたみ傘、電子辞書などを入れるポケットが随所にあって工夫がみられる。

2日目9時30分より、部門ごとに分かれて賞の発表がされ、審査委員長が全副賞の贈呈と審査講評を行う。8位以下はこの場で賞状も贈呈するため、被服構成学

部会長賞は全体表彰式で披露されない。今年度の副賞には、かわいい！うさぎのぬいぐるみと赤毛のアンを題材にしたクロスステッチのキットを選んだ。部会が編集したスクールソーイングも宣伝とともに忘れてはいない。副賞は喜んでもらえたと思っている。

講評・総括で述べたことは以下のとおりである。自分、家族や親戚のために作る、安全・安心をテーマにしたバラエティに富む作品があった。細やかな工夫がなされており、豊かな生活を創るテーマに合致するが、全体としては似通っており新規性の点ではあと一步であった。アイデアの豊かさに機能性、縫製技能の伴うものが入賞していたように思う。全選手へのねぎらい、今後の活躍を期待するとともにものづくりや家庭科の楽しさを伝える教師などの職業を目指してほしいと締めくくった。

作品コンクールの展示を見られなかったのは残念であるが、山梨市立山梨北中学校 山崎紗英さんの「リバーシブルバック」と、水戸市立石川中学校 三宅木の実・田中咲弥香さん共同による「Happiness to you フラワーガール（結婚式で女兒が着用する花びらの散りばめられたドレス）」が部会奨励賞に選定された。全国から応募された作品をみると、こうしたコンクールがものづくりの機会を与える大きな役割を果たしていると感じる。

2日目の表彰式までの間、控え室でペットボトルのキャップと端切れを利用した針刺しのブースを設けて、本研究室の3年生2名がお世話にあたってくれた。会場の都合で1日のみの設営となったが約20名の中学生や保護者が体験し、好評であったと聞いている。

私自身は審査委員長の役割を終えてひとまず安堵したが、3年間に出品された総数48個のバッグのレポートは宝物であり、いつの日か時間ができたときに、製作してみたいと思っている。



競技の会場



審査員を背に頑張る選手

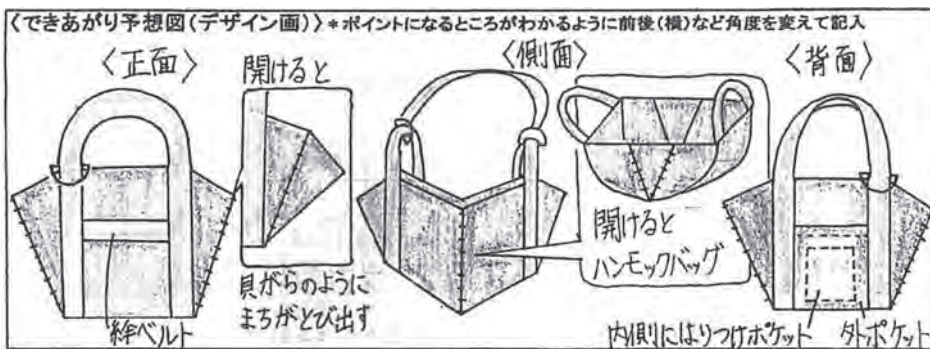


製作・発表を終えて記念撮影



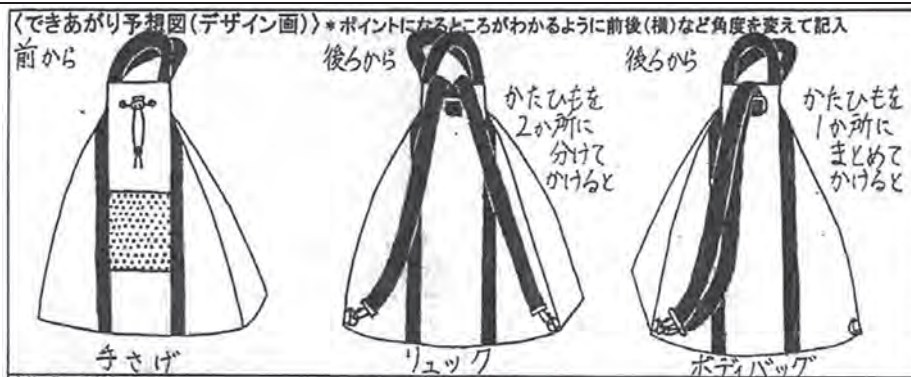
2日目ワークショップ (ペットボトルの針刺し)

文部科学大臣賞



5変化員がらハンモックバッグ 岐阜県大垣市西部中学校 村北明日香

被服構成学部会長賞



荷物が増えても大丈夫! きんちゃく 3way バッグ 徳島県立城ノ内中学校 多田啓夏

関連学会短信

日本衣服学会報告

共立女子大学 丸田 直美

日本衣服学会第68回(平成28年度)年次大会は、平成28年11月5日(土)に大妻女子大学千代田キャンパスにて開催された。本学会は、「広く衣服及び衣生活教育全般にかかわる諸問題を総合的視野にたつて研究を行う学術団体」とされている。今年度は、口頭発表13演題、ポスター発表7演題の発表が行われ、発表内容は被服教育、着物文化、洗濯、被服造形、快適性、被服心理、福祉等と非常に幅広く、質疑応答も大変活発であった。

特別講演は、「緋と紫 ―ユーラシア大陸の東と西の歴史の中で―」と題し、東京工業大学名誉教授の小宮山二郎氏にご講演いただいた。小宮山氏の長年にわたるご研究の成果として、正倉院の緋と紫の色相と堅牢度の再現、正倉院宝物の起源となる国家珍宝帳の26色の記載と正倉院の遺品の色の対応など、日本の色の源流となったご研究をお話しいただいた。壮大な歴史的資料を科学的な根拠のもとに解明された貴重な研究を知ることができた。

夕方には大学内Kotakacafe(コタカカフェ)にて懇親会が開催された。優秀発表者1件の表彰も行われた。参加者がゆったりとソファに座っての食事であったため、全員との懇談とはいかなかったが、可能な限り参加者にマイクを回して、学会運営に関しての一言や本日の感想などを語り、和やかに懇親を深めることができた。

翌日6日(日)にはパナソニック汐留ミュージアムにおいて、「モードとインテリアの20世紀―ポワレからシャネル、サンローランまで―」の見学会が催された。1900年から60年代までのハイファッションと女性の暮らしを概観しながら、同時代のインテリアの空間構成の中で、ポワレ、フォルチュニイ、シャネル、ディオール、サンローランなどの20世紀の華麗なオートクチュールドレス、版画、資料を満喫することができた。

日本繊維製品消費科学学会報告

滋賀県立大学 森下あおい

2016年度の年次大会は、6月25日(土)・26日(日)に東京家政大学の板橋キャンパスにて行われた。今年度の発表件数は、口頭発表87件、ポスター発表76件、企画発表7件、特別講演1件、学生発表12件であった。

まず特別講演は、「人口知能はビジネスをどう変えるのか? “ヒト・モノ・カネ” から “ヒト・データ・キカイ” へ」をテーマとして、ヤフー株式会社の安宅和人氏が、ビックデータと人口知能について、人の業務への影響や社会における問題との関係などの視点で知見を述べられた。

二つのメインテーマによる企画発表では、まず開催校の東京家政大学の山田民子教授をオーガナイザーとして、セルロース研究開発の総説、セルロースナノファイバーの衣料分野への応用など、幅広く開発されている天然資源としてのセルロース現状が紹介された。次に、株式会社デサントの清嶋展弘氏をオーガナイザーとして「スポーツアパレル」をテーマに、ラグビーユニフォーム、競泳水着、ウェアラブルなど、いずれも機能性と感性を満たす技術開発の現状がスポーツ用品各社によって行われた。

今回の年次大会では、新たに4つの研究委員会が立ち上げられている。それらは(1)国際化推進委員会(2)スマートテキスタイル研究委員会(3)災害・安全研究委員会(4)オリンピック・パラリンピック研究委員会、である。今後、国際化推進では情報開示や幅広く国際的な交流を行うための課題を検討されるほか、スマートテキスタイルでは、アパレル、医療やスポーツなど、分野を融合させて新しい技術を展開する事の検討、また災害や安全、オリンピック・パラリンピックの委員会では、いずれも学会が社会に向けて活動を発信し、ニーズに応え課題を解決していけるよう、企業と大学、研究機関によって活発な意見交換を行っていくことが計画された。

国際服飾学会報告

檀山女学園大学 滝澤 愛

1982年の台湾大会からその歴史をスタートさせ、開催国を日本、韓国、台湾と巡る国際服飾学会は2016年で27回目を数え、韓国ソウルの漢城百済博物館で8月24日、25日に行われた。今回は日本、韓国、台湾、シンガポール、アメリカ、イギリス、モンゴル、中国の計8か国から約170人の参加があった。

24日朝に主要参加国の代表による挨拶とテープカットのオープニングセレモニーに始まった今回の会議のテーマは“East Asian Aesthetics and Future Fashion”。そのテーマを基にした口頭発表、ポスター発表、作品発表、基調講演に加え、復元した韓国王朝

礼服をモデルに次々と着装させていく特別パフォーマンスや博物館ツアーも行われた。閉会式では投票により選ばれた各部門の最優秀賞が表彰され、盛会裏に終わった。



平成 28 年度 研究動向（修士論文テーマ・科学研究費補助金研究課題）

「平成 28 年度修士論文テーマ」

「家庭科の衣生活・住生活学習に対する中学生と教師との認識の差異に関する研究」東 睦美（指導：鈴木明子・村上かおり）広島大学大学院教育学研究科生涯活動教育学専攻 人間生活教育学専修

「平成 28 年度 科学研究費補助金 研究課題」

基盤研究（A）

「アパレルの質と国際競争力向上の基盤となる日本人の人体計測データの構築と多角的分析」, 平成 25 年から 29 年度, 研究代表者：日本女子大学 大塚美智子

基盤研究（B）

「スタイル画の創造性を活かした個人対応ファッションデザインのための基盤技術開発」, 平成 27 年から 29 年度, 研究代表者：滋賀県立大学 森下あおい

「着衣と人体生理状態を考慮した無線通信による熱中症予防支援システムの構築」, 平成 27 年から 30 年度, 研究代表者：横浜国立大学 薩本弥生

「アパレルの国際競争力の強化を目指した 3D バーチャル工業用ボディの開発と性能評価」, 平成 28 年から 31 年度, 研究代表者：京都女子大学 渡邊敬子

基盤研究（C）

「ICT 活用による被服製作学習の支援」, 平成 26 年から 28 年度, 研究代表者：埼玉大学 川端博子

「肢体不自由者の更衣動作を助ける座位姿勢に適したズボンの設計」, 平成 26 年から 28 年度, 研究代表者：熊本大学 雙田珠己

「量産衣料のデジタル仮縫い工房」開発のためのベーシックパターンモデルの検討」, 平成 27 年から 29 年度, 研究代表者：大妻女子大学短期大学部 土肥麻佐子

「こころとからだの関係から考えるパーソナルファッションとその教材化に関する研究」, 平成 27 年から 29 年度, 研究代表者：広島大学 村上かおり

「アパレル製品設計のための 50 代女性の 3D シミュレーションモデル開発に向けての研究」, 平成 28 年から 30 年度, 研究代表者：共立女子大学 丸田直美

((注) 継続研究と部会員の皆様への呼びかけに対してお申し出頂いた分のみを掲載いたしました.)

会 務 報 告

1. 平成 28 年度会務報告

1) 事業報告

① 総 会

日時：平成 28 年 5 月 28 日（土）

場所：金城学院大学 W2 棟 3 階

② 夏期セミナー

「アパレル人材育成を目指した小・中・高・大学
のものづくり教育の方向性」

日時：平成 28 年 8 月 24 日（水） 25 日（木）

場所：グリーンヒルホテル尾道

コンテックス株式会社

③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：平成 29 年 1 月 22 日（土） 23 日（日）

場所：TOC 有明 JK ホールディングスビル

④ 研究例会

「世界市場で評価される日本の伝統的染・織」

日時：平成 29 年 3 月 8 日（水）

場所：京都女子大学 株式会社 細尾

⑤ 部会誌 38 号発行 平成 29 年 3 月 31 日（金）

⑥ ホームページの維持管理

⑦ 科学研究費（基盤研究（A））研究活動

(5) 平成 28 年度予算（案）について

(6) 平成 28 年度事業計画について

(7) 平成 28 年度総会準備

(8) その他

② 第 2 回運営委員会

日時：平成 28 年 5 月 28 日（土）

場所：金城学院大学 W2 棟 3 階

(1) 平成 28 年度総会準備

(2) 平成 28 年度夏期セミナーについて

(3) 平成 28 年度研究例会について

(4) 部会規約について

(5) 科学研究費活動について

③ 第 3 回運営委員会

日時：平成 28 年 8 月 24 日（水）

場所：グリーンヒルホテル尾道ボン・シェール

(1) 平成 28 年度研究例会について

(2) 部会誌 38 号編集案について

(3) 平成 29 年度夏季合同セミナーについて

(4) 科研の進捗状況報告

(5) その他

2) 庶務報告

① 第 1 回運営委員会

日時：平成 28 年 4 月 17 日（日）

場所：日本女子大学 80 年館共通ゼミ室兼 851
控室

(1) 平成 28 年度夏期セミナーについて

(2) 平成 27 年度会計報告

(3) 平成 27 年度夏期セミナー会計報告

(4) 平成 27 年度会計監査報告

3) 会計報告（次頁以降参照）

2. 平成 29 年度事業計画（案）

① 総会

日時：平成 29 年 5 月 27 日（土）

場所：奈良女子大学

② 第 2 回夏季合同セミナー

「生活の質向上を目指す家政学の世界-オリンピック

ク・パラリンピックにむけての取り組みと障がい者衣
料への応用（仮） -

日時：平成29年9月3日（日）4日（月）

場所：信州大学

③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：平成30年1月下旬

場所：TOC有明（予定）

④ 研究例会

⑤ 部会誌39号の発行

⑥ ホームページの維持管理

⑦ 科学研究費（基盤研究（A））研究活動

⑧ その他

平成27年度 被服構成学協会 夏期セミナー 収支報告書

◆夏期セミナー

収入の部

費目	予算	決算	備考
参加費	390,000	281,000	部会員 7,000円×36名
学会活動助成金 ^{※1}	100,000	100,000	一般 7,000円×3名
部会会計より補助費	350,000	350,000	学生 2,000円×4名 ^{※2}
合計	840,000	731,000	合計43名

※1:実質入金額(徴収税を抜いた額)84,083円

※2:部会員1名含む

支出の部

費目	予算	決算	備考
1 会場費	185,770	185,770	
2 講師謝礼	130,000	130,000	
復興特別所得税	14,781	14,781	
3 要旨集	45,000	43,200	
4 印刷代	30,000	0	
5 雑費	50,000	39,275	
6 会議費	100,000	10,000	
7 通信・輸送費	30,000	11,604	
8 交通費	129,136	104,216	徴収税 1,136円を含む
9 庶務費	20,000	3,952	
10 人件費	0	0	
11 予備費	105,313	12,400	懇親会補助12,000円 チケット代不足400円
合計	840,000	555,198	

差引残高

731,000-555,198= 175,802

◆懇親会

収入の部

費目	予算	決算	備考
懇親会費	165,000	166,000	部会員5,000円×32名
予備費より補助	10,000	12,000	学生3,000円×2名
合計	175,000	178,000	※講師2名参加

支出の部

費目	予算	決算	備考・領収書No.
食事・飲み物含む	175,000	178,000	No.12-1
合計	175,000	178,000	

差引残高

178,000-178,000= 0

◆8/28 見学会

収入の部

費目	予算	決算	備考
見学会チケット代		12,000	400円×30名
予備費より補助		400	不足分
合計		12,400	

支出の部

費目	予算	決算	備考・領収書No.
見学会 チケット代		12,400	400円×31名 No.13-1
合計		12,400	

差引残高 12,400-12,400= 0

◆徴収税

内 訳	金 額	備 考
講師謝礼徴収税	14,781	
講師交通費徴収税	1,136	
合計	15,917	

日本家政学会本部会計に納入いたしました。

※実際は本部から上記金額を引いた金額を受領

◆残金

平成27年度 夏期セミナーの残金 175,802円を被服構成学部会会計に納入いたしました。

平成28年 1月 22日
 会計 伊藤海織  青山喜久子  中村邦子  渡部 渡部 

被服構成学部会収支計算書

(平成27年4月1日から平成28年3月31日まで)

科目	予算	決算	備考
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
基本財産運用益			
特定資産運用益	150	49	
受取入金			
受取会費	275,000	292,000	部会費@2500×112名、H28年分@4000×3名
事業収入	480,000	447,000	
会誌購読料			
大会等参加費	480,000	447,000	夏期セミナー参加費
広告料			
学会刊行物売上			
著者負担金			
受取補助金			
一般寄付金			
特別寄付金			
雑収入	3,000	138	
★本部からの繰入金収入	100,000	141,531	活動助成金
事業活動収入計	858,150	880,718	
2. 事業活動支出			
①事業費支出	1,353,000	1,021,654	
大会会場使用料			
大会消耗品			
大会印刷費			
大会通信運搬費			
大会臨時雇賃金			
講演会等会場使用料	320,000	185,770	夏期セミナー
講演会等講師謝金	190,000	271,271	夏期セミナー、研究例会
講演会等消耗品	320,000	238,196	夏期セミナー懇親会費他
講演会等通信運搬費	20,000	11,604	
講演会等臨時雇賃金			
学会誌印刷費	50,000	129,321	夏期セミナー要旨集、部会誌
学会誌通信費	30,000	21,735	
編集委員会費			
研究発表要旨集関連費用			
研究補助費			
表彰費	20,000	23,400	ものづくりフェア副賞、関連費用含む
関連学会費	10,000	10,000	協賛金
給料手当			
広報費	35,000	57,604	ドメイン契約(2005/3/31～2015/3/31)更新料含む
福利厚生費			
旅費交通費	200,000	12,376	
通信運搬費	20,000	8,962	
備品費			
消耗品費	8,000	11,335	
光熱水料費			
雑費	20,000		
総会費			
事務委託費			
租税公課			
地代			
会議費	100,000	37,300	
支払負担金	5,000	2,780	振込料
印刷費	5,000	0	
諸謝金			
修繕費			
減価償却費			
リース料			
事務所管理費			
②管理費支出			
事業活動支出計	1,353,000	1,021,654	
事業活動収支差額	▲ 494,850	▲ 140,936	
II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入	500,000	500,000	
2. 投資活動支出			
投資活動収支差額	500,000	500,000	
III 財務活動収支の部			
1. 財務活動収入			
2. 財務活動支出			
財務活動収支差額	0	0	
当期収支差額	5,150	359,064	
前期繰越収支差額	905,534	905,534	
次期繰越収支差額	910,684	1,264,598	

貸借対照表（平成28年3月31日現在）

科 目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産			
手許現金	0	0	0
普通預金(三菱東京UFJ銀行国分寺支店)	830,090	652,646	177,444
通常預金			
振替口座(ゆうちょ銀行〇一九)	434,508	252,888	181,620
流動資産合計	1,264,598	905,534	359,064
2. 固定資産			
部会大会基金引当預金			
定期預金(三菱東京UFJ銀行国分寺支店)	0	500,000	▲ 500,000
通常貯金(ゆうちょ銀行)	0		
固定資産合計	0	500,000	▲ 500,000
資産合計	1,264,598	1,405,534	▲ 140,936
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払い金			0
負債合計			0
III 正味財産の部			
正味財産			
1. 指定正味財産			
2. 一般正味財産	1,264,598	1,405,534	▲ 140,936
負債及び正味財産合計	1,264,598	1,405,534	▲ 140,936

監 査 報 告 書

一般社団法人 日本家政学会
会 長 牛 腸 ヒロミ 殿


私ども監事は、平成27年4月1日から平成28年3月31日までの平成27年度の部会の重要な会議に出席するほか、事業報告を聞き、重要な書類を閲覧し、主要な調査を行い、かつ財務諸表及び収支計算書につき監査を実施した結果、次のとおり報告します。


1. 事業報告は規程に従い、部会の状況を正しく示しているものと認めます。
2. 財務諸表すなわち貸借対照表は平成27年度期末現在の財政状態を正しく示しているものと認めます。
3. 収支計算書は平成27年度の収支の状況を適正に表示しているものと認めます。
4. 理事の職務遂行に関する不正の行為または定款に違反する重大な事実は認められません。

以上

平成28年 4 月 4 日

一般社団法人 日本家政学会
(被服構成学) 部会

監事 布施谷 節子 

監事 鳴海多恵子 

被服構成学部会収支予算書

(平成28年4月1日から平成29年3月31日まで)

科目	28年度予算	27年度予算	増減	備考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用益				
特定資産運用益	0	150	▲150	
受取入金				
受取会費	420,000	275,000	145,000	部会費@4,000円×105名
事業収入	480,000	480,000	0	
会誌購読料				
大会等参加費	480,000	480,000	0	夏期セミナー参加費・懇親会費
広告料				
学会刊行物売上				
著者負担金				
受取補助金				
一般寄付金				
特別寄付金				
雑収入	500	3,000	▲2,500	
★本部からの繰入金収入	100,000	100,000	0	活動助成金
事業活動収入計	1,000,500	858,150	142,350	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	1,368,000	1,353,000	15,000	
大会会場使用料				
大会消耗品				
大会印刷費				
大会通信運搬費				
大会臨時雇賃金				
講演会等会場使用料	250,000	320,000	▲72,000	夏期セミナー、研究例会
講演会等講師謝金	250,000	190,000	60,000	夏期セミナー、研究例会
講演会等消耗品	300,000	320,000	▲20,000	夏期セミナー、研究例会
講演会等通信運搬費	20,000	20,000	0	夏期セミナー、研究例会
講演会等臨時雇賃金				
学会誌印刷費	100,000	50,000	50,000	部会誌、夏期セミナー要旨集
学会誌通信費	25,000	30,000	▲5,000	部会誌、夏期セミナー要旨集
編集委員会費				
研究発表要旨集関連費用				
研究補助費				
表彰費	23,000	20,000	3,000	ものづくりフェア副賞
関連学会費	10,000	10,000	0	ものづくりフェア協賛金
給料手当				
広報費	35,000	35,000	0	HP契約・維持費
福利厚生費				
旅費交通費	200,000	200,000	0	
通信運搬費	15,000	20,000	▲5,000	
備品費				
消耗品費	10,000	8,000	2,000	
光熱水料費				
雑費	20,000	20,000	0	
総会費				
事務委託費				
租税公課				
地代				
会議費	100,000	100,000	0	
支払負担金	5,000	5,000	0	振込料
印刷費	5,000	5,000	0	
諸謝金				
修繕費				
減価償却費				
リース料				
事務所管理費				
②管理費支出				※法人会計科目につき省略
事業活動支出計	1,368,000	1,353,000	15,000	
事業活動収支差額	▲367,500	▲494,850	▲127,350	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入	0	500,000	▲500,000	
2. 投資活動支出				
投資活動収支差額	0	500,000	▲500,000	
III 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入				
2. 財務活動支出				
財務活動収支差額	0	0		
当期収支差額	▲367,500	5,150	▲372,650	
前期繰越収支差額	1,264,598	905,534	359,064	
次期繰越収支差額	897,098	910,684	▲13,586	

お 知 ら せ

1. 部会費について

平成 29 年度の被服構成学部会費（正会員：4000 円，学生会員：2500 円）は、5 月中に下記郵便払込み口座にご送金くださるようお願い申し上げます。また、過年度未納の方には別紙にてお知らせいたしましたので、併せてご送金ください。

郵便払い込み口座 00160-2-322300 日本家政学会被服構成学部会

なお、会費に関するお問い合わせは、下記をお願いいたします。

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1
東京家政大学 服飾美術学科 田中早苗 宛
TEL・FAX：03-3961-9002
E-mail：stanaka@tokyo-kasei.ac.jp

2. 入退会、住所変更等について

お届け、お問合せは、下記をお願いいたします。

〒102-8357 東京都千代田区三番町 12
大妻女子大学 短期大学部 中村邦子 宛
TEL・FAX：03-5275-5266
E-mail：nakamuraku@otsuma.ac.jp

※ 入会申込書および変更届、退会届の書式は最終ページをご参照下さい。

※ なお、退会届につきましては（一社）日本家政学会の退会手続きとは別処理になっていますので、部会への手続きも併せてさせていただきますようお願いいたします。

3. E-mail アドレスについて

E-mail アドレスの登録にご協力いただきありがとうございます。アドレスをお持ちの方でまだ登録いただいていない方は、平成 29 年度会費納入の際に振り込み用紙の通信欄にご記入いただければ幸いです。またアドレスの変更がある場合には、なるべくすみやかにお知らせくださいますようよろしくお願い申し上げます。

(一社) 日本家政学会第2回家政学夏季セミナーのご案内

実行委員長 大塚美智子

(一社) 日本家政学会夏季セミナーは実践的総合科学である家政学が持てる情報を広く社会に発信することを目指し、平成28年にスタートしました。本セミナーは家政学会の全ての領域の会員が自由に参加し、意見交換する場でもあります。

第2回の平成29年度は9月3日(日)、4日(月)の2日間、信州大学長野キャンパスで開催されます。本セミナーの総合テーマは昨年度に引き続き“生活の質的向上を目指す家政学の世界”で、本年度のテーマは“オリンピック・パラリンピックがつなぐユニバーサル衣料の未来”です。実行委員会は被服構成学部会、被服衛生学部会、色彩・意匠部会、服飾史・服飾文化部会の4部会で編成しました。

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックは暑熱下での開催となります。そこには全世界から多くの人びとが集まり、言語、身体条件、生活習慣の異なる人々とさまざまな文化交流が行われますが、安全・安心な大会にすることが必須となります。

暑さ対策、安全性を検討することはもちろん、オリンピック・パラリンピアンに最高のコンディションを提供するために家政学の視点から取り組めることは多くあります。そして2020年を目指して取り組む課題は、ユニバーサル衣料の未来にもつながります。

第1日目の9月3日(日)は講演の部とし、オリンピック、パラリンピアン、アスリートの身体機能と衣服開発技術に関するセッションと、オリンピック、スポーツウェアの歴史と、未来のデザインに関するセッションの2セッションを企画し、総合スポーツメーカーの研究者、服飾史家をはじめ各界でご活躍の6名の講師の方々をお招きしご講演いただきます。講演会の後には部会総会と被服構成学部会独自の懇親会を企画しています。

第2日目の9月4日(月)は、ユニバーサルデザインを視野に、まず京都女子大学の諸岡晴美先生と生活動作支援ロボット curara®(クララ)の開発者の信州大学の橋本実先生に基調講演をいただき、次いで障害者の衣服、カラーユニバーサルデザインについて2名の講師にご講演いただいた後、パネルディスカッションを行います。

2日目のお昼は美味しいお料理をいただきながら参加者の皆様との情報交換を行い、午後には信州大学のFiiコースと松代コースの2コースのエクスカージョンを企画しています。多くの部会員の皆様のご参加を期待しています。

2017 一般社団法人日本家政学会第 2 回家政学夏季セミナープログラム (案)

会場 信州大学教育学部 〒380-8544 長野市西長野 6 の口

9月3日(日)		
12:30~	総合受付	
企画講演会	(N101 教室)	(N201 教室)
13:25~13:30	開会挨拶	開会挨拶
13:30~14:20	脊椎損傷者の体温調節と循環調節 奈良女子大学 芝崎学氏	オリンピック日本代表選手団開会式用 ユニフォームの歴史 —『日の丸カラー』の誕生と継承に注目して— 文化学園大学、成蹊大学他非常勤講師 安城寿子氏
14:20~15:10	障がいを持つアスリートとの協創について、 —2020 東京 op/pp 向けての提案— ミズノ株式会社、研究開発部、主任研究員 荻野毅氏	近代女性スポーツファッションの変遷 —スポーツと装いの愉しみ— 梅花女子大学 好田由佳氏
15:10~15:25	休憩 (コーヒープレイク)	
15:25~16:15	アパレル三次元テクノロジーを活用した スポーツ衣料開発とシンクロする日常衣料開発 株式会社ミズーラ代表取締役 佐々浩司氏	参加型プロジェクションマッピングについて 大同大学非常勤講師、NODE-LAB 代表 河村陽介氏
16:30~	部会企画	
9月4日(月)		
パネルディスカッション (E504 教室)		
9:00~9:30	基調講演 1. ユニバーサル仕様の衣料設計を考える	京都女子大学 諸岡晴美氏
9:30~10:10	基調講演 2. 医療福祉用ロボティックウェア curara®の開発と展望	信州大学 橋本稔氏
10:10~10:30	利用者主体のファッション支援 —誰もがおしゃれを楽しむために—	金城学院大学 平林由果氏
10:30~10:50	カラーユニバーサルデザイン	元日本女子大学 芦澤昌子氏
10:50~11:20	意見交換	
11:40~13:00 全体情報交換会 (フジヤ御本陣)		
エクスカージョン		
13:10~17:30	信州大学繊維学部 Fii、上田、見学コース	
13:10~16:30	松代見学コース	

一般社団法人日本家政学会被服構成学部会規約

- 第1条（名 称） 本会は、一般社団法人日本家政学会被服構成学部会と称する。
- 第2条（目 的） 本会は、会員相互の研究に関する連絡及び協力をはかり、被服構成学に関する教育・研究を促進することを目的とする。
- 第3条（事 業） 本会は、前述の目的を達成するため次の事業を行う。
- 1 総会を開催する。
 - 2 被服構成学に関する研究・討議・講演などを行う。
 - 3 部会誌を発行する。
 - 4 その他の必要な事業を行う。
- 第4条（会 員） 本会の会員は、次のとおりとする。
- 1 正会員 被服構成学及びこれに関係する分野を研究する一般社団法人日本家政学会会員で、本会の目的に賛同して入会した個人。
 - 2 学生会員 本会の目的に賛同して入会した学生。
 - 3 名誉会員 元部会長、または、特に本会の発展に寄与した会員で、70歳を越えた場合に、運営委員会の議決をもって推薦された者。
- 第5条（会 費） 会員は年会費を納入する。
- 1 年会費は次のとおりとする。
正会員 4,000円
学生会員 2,500円
 - 2 名誉会員は会費を納めることを要しない。
- 第6条（入 会） 本会に入会を希望する者は、所定の入会申込書を部会長に提出し、運営委員会の承認を得るものとする。
- 第7条（退 会） 会員が退会しようとするときは、その旨を部会長に届け出るものとする。この場合、既納の会費は返却しない。
また、継続して2年間会費を滞納した場合は、原則として退会したものとみなす。
- 第8条（役 員） 本会に次の役員をおく。
- 部会長 1名
副部会長 2名
運営委員 若干名
監 事 2名
- 第9条（役員を選任） 役員を選任は、次のとおりとする。
- 1 部会長及び監事は、運営委員会がこれを推薦して、総会で選任する。部会長の選任および解任は、理事会の承認を受けるものとする。

- 2 副部長及び運営委員は、部長がこれを推薦し、会員に報告する。
- 第 10 条（役員の任期） 1 役員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。
2 役員の再任については、申し合わせを別に定める。
- 第 11 条（役員の職務） 役員の職務は次のとおりとする。
1 部長は本会を代表して会務を統轄し、事業計画および予算、事業報告および決算を毎事業年度、理事会に報告する。
2 副部長は部長を補佐し、必要な場合には部長の職務を代行する。
3 運営委員会は本会の業務を運営する。
4 監事は本会の会計監査を行う。
- 第 12 条（役員の解任） 役員が次の各号の一に該当するときは、解任を運営委員会で動議し、総会で決議する。
1 心身の故障のため職務の執行に堪えないと認められるとき。
2 職務上の義務の違反、その他役員たるにふさわしくない行為があると認められたとき。
- 第 13 条（会計） 本会の会計は次のとおりとする。
1 経費は会費、その他をもってまかなう。
2 会計年度は、毎年 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月末日に終了する。
- 第 14 条（規約の改廃） 本規約の改廃は総会において承認を受け、理事会に報告する。

以上

附 則

- 1 施行に関する内規は別に定めることができる。
- 2 この会則の施行は昭和 54 年 10 月 8 日からとする。
- 3 この会則の一部改正の施行は昭和 59 年 8 月 3 日からとする。
- 4 この会則の一部改正の施行は昭和 63 年 8 月 1 日からとする。
- 5 社団法人日本家政学会部会規定に基づき、平成 15 年 8 月 27 日から被服構成学部会会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。
- 6 この規約の施行は平成 15 年 8 月 27 日からとする。
- 7 社団法人日本家政学会部会規定に基づき、平成 18 年 8 月 22 日から被服構成学部会規約を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会会則とする。
- 8 この会則の施行は平成 18 年 8 月 22 日からとする。
- 9 社団法人日本家政学会部会運営規程および部会運営規程細則に基づき、平成 22 年 5 月 29 日から被服構成学部会会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。
- 10 この規約の一部改正の施行は平成 22 年 5 月 29 日からとする。
- 11 この規約の一部改正の施行は平成 24 年 5 月 12 日からとする。
- 12 この規約の一部改正の施行は平成 28 年 3 月 14 日からとする。
- 13 この規約の一部改正の施行は平成 28 年 5 月 28 日からとする。

一般社団法人日本家政学会被服構成学部会申し合わせ

- 1 運営委員会 運営委員会は、部会長、副部会長、運営委員、監事で構成し、その中に庶務、会計、企画、広報、編集担当をおく。
- 2 役員の任期 (1) 規約第9条に従って部会長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、継続して3期はつとめられない。
(2) 運営委員の任期はできるだけ2期4年間とし、その交代は半数ずつ交互に行うことが望ましい。期間をあけての再任は、これを妨げない。
- 3 運営委員の選任 運営委員の選任にあたっては、できるだけ部会員が在住する広範な地区から選ぶように配慮する。
- 4 事務局幹事 (1) 必要に応じて事務局幹事をおくことができる。
(2) 事務局幹事は若干名とし、部会長がこれを指名する。
(3) 事務局幹事は役員会に同席することができるが、議決権は持たない。
- 5 事務局 事務局は、原則として部会長のもとにおく。
- 6 申し合わせの改廃 運営委員会の議を経て、総会で承認し、理事会に報告する。

附則

- 1 この申し合わせは、平成15年8月27日から施行する。
- 2 この申し合わせの一部改正施行は、平成18年8月22日からとする。
- 3 この申し合わせの一部改正施行は、平成24年5月12日からとする。

平成 28・29 年度役員

部会長	大塚美智子	日本女子大学
副部会長	鈴木 明子	広島大学
	川端 博子	埼玉大学

運営委員

(庶務)	中村 邦子	大妻女子大学 短期大学部
------	-------	-----------------

	小山 京子	美作大学
	森下あおい	滋賀県立大学
(会計)	田中 早苗	東京家政大学
	渡部 旬子	文化学園大学 短期大学部
	葛西 美樹	東北女子大学

(企画)	原田 妙子	名古屋女子大学 短期大学部
------	-------	------------------

	渡邊 敬子	京都女子大学
	滝澤 愛	椋山女学園大学

(広報)	丸田 直美	共立女子大学
	伊藤 海織	金城学院大学

(編集)	十一 玲子	神戸女子大学
	村上かおり	広島大学
	角田 千枝	相模女子大学

(監事)	鳴海多恵子	東京学芸大学
	森 由紀	甲南女子大学

事務局 〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1

日本女子大学 家政学部 被服学科

TEL & FAX : 03-5981-3486

E-mail : mohtsuka@fc.jwu.ac.jp

(社)日本家政学会 被服構成学部会入会申込書および変更届, 退会届

入会 変更 退会 (いずれかを○で囲む)	申込年月日 年 月 日		受付年月日 年 月 日	
	ローマ字			
	氏名	氏	名	
	西暦	19 年生	性別	男・女 (どちらかを○で囲む)
家政学会所属支部				
自宅住所	〒(-)			
	TEL		FAX	
	E-mail			
勤務先・職名 および所在地	勤務先		職名	
	〒(-)			
	TEL		FAX	
	E-mail			
専門分野	<研究分野> <担当授業科目>			
最終学歴				
学位				
部会誌送付先	自宅・勤務先 (どちらかを○で囲む)			

太線枠内は必ず記入してください。細線枠内は差支えない範囲でお書きください。

退会の場合は、今後、連絡する必要がある場合に備えて、連絡がつく自宅か勤務先の情報をご記入ください。

お届けは「お知らせ」ページの宛先まで、添付メールまたは郵送にてご提出下さい。

部会費は「お知らせ」ページの口座にご送金ください。

* 個人情報保護には十分に注意をいたします。

なお、書式を被服構成学部会ホームページからダウンロードしてお使いいただくこともできます。

URL: <http://h-kohsei.com>

編集後記

日々ご多忙にもかかわらず、執筆および編集にご協力をいただきました先生方に、厚くお礼申し上げます。今年度は、布施谷節子先生の学会賞受賞という大変嬉しい記事を掲載することができました。また昨年からの編集を通して、先生方の研究成果や、教育活動に資する姿勢など本当に多くのことを学ばせていただきました。部会誌が先生方にとって、被服構成の情報源となれば幸いです。今後ともご協力のほどよろしくお願い申し上げます。 (十一)

被服の抱える問題点とその取り組み、先生方の多岐に渡る素晴らしいご研究など、貴重な内容が詰まった本誌を発行できましたのも、お忙しい中編集にご協力下さいました先生方のご尽力によるものと心より感謝申し上げます。今年度より編集として携わり、目標となる諸先輩方のご活躍をお聞きできた事で、視野が広がり研究意欲も高まりました。私のような未熟な研究者達の刺激となる機会を与えて下さった皆様にも重ねて感謝申し上げます。今後共変わらぬお力添えを何卒宜しくお願い致します。 (角田)

平成 29 年 3 月 31 日発行

発行：(一社) 日本家政学会 被服構成学部会

印刷：株式会社アディス

TEL : 078-265-6336